

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K19803

研究課題名(和文)統合失調症の急性期におけるオープンダイアログを用いた介入について

研究課題名(英文)The intervention using the open dialog in the acute phase of schizophrenia

研究代表者

金田 礼三(Kaneda, Reizo)

金沢大学・医学系・協力研究員

研究者番号：40456413

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文): オープンダイアログの手法を用いた話し合いの場では、対話を繰り返すことにより、参加者の自発性が促される印象があった。参加者が対等に自分の思いや興味のあることを語り、それぞれの話が無視されたり否定されたりせず受け止められていく中で、安心感が育まれることが、自発性につながるのではないかと考えられた。自発的な活動についての話が増えていくとともに、精神症状についての訴えは減少、もしくは、みられなくなる場合があった。全体を通して安全に施行することが可能であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本人及び家族が求める場合において、精神科医療にオープンダイアログを用いた介入をしていくことは可能であり、安全に施行できると考えられた。今後、急性期の精神症状について複数人で対話的に対応するシステムを確立することができれば、結果として薬物療法の行われる頻度を減少させ、薬物療法に伴う様々な問題を減少させる可能性が考えられた。オープンダイアログの世界観を共有していく中で、医療者側にも自発性が育まれ、薬物療法以外の選択肢も考えやすくなるなどの変化が促されると実感された。

研究成果の概要(英文): In the discussion sessions using the open dialogue method, there was an impression that the participants' spontaneity was encouraged through repeated dialogue. It was thought that spontaneity may result from a sense of security fostered as participants spoke about their thoughts and interests on an equal footing, and as each story was accepted without being ignored or denied. As participants talked more about spontaneous activities, complaints about psychiatric symptoms decreased or were not seen in some cases. The entire procedure was safe.

研究分野：精神医学

キーワード：対話 オープンダイアログ 安全性 安心感 自発性 世界観 システム 薬物療法

## 1. 研究開始当初の背景

統合失調症の急性期の代表的な症状(精神病症状)は、幻覚妄想とこれに伴う言動である。抗精神病薬を用いた薬物療法により、統合失調症の精神病症状が改善することは広く知られており、現在統合失調症の急性期治療において薬物療法は欠かせないものとなっている。

しかし、一旦開始された薬物療法を中止することは困難であることが多く、薬物療法を継続することによる認知機能への悪影響、錐体外路症状や耐糖能異常、肝機能障害、心血管系副作用、薬物療法に伴う生活、自動車運転、職業、結婚、妊娠、授乳についての制限、薬物中断による再発の危険性など、副作用や生活上の制限が多い。

このような抗精神病薬による治療であるが、実はその有効性のデータは再発した患者においてのみ確立されており、初回発症時における有効性については確立していない(Bola J, Cochrane Database Syst Rev. 2011)。過感受性精神病の知見も考えあわせ、初回発症時の抗精神病薬の導入により、抗精神病薬の長期間の服用が必要な状態が生じ、服用中断により幻覚妄想が再燃しやすくなっている可能性はないのかという問題意識に至った。薬物療法の代替、又は使用薬物量の軽減、を図ることができれば、治療や生活の選択肢が広がるのではないだろうか？

そこで、必ずしも薬物療法に頼らない方法として現在世界的に注目されているのが、オープンダイアログである。オープンダイアログは、危機に陥っている家族や個人に対して、あらかじめ計画された治療介入という既成の解決策を与えずに、患者の体験を認め、患者とのつながりを強くすることで安心感をもたらしていく。オープンダイアログを行っているフィンランドのケロプダス病院では、薬物治療の併用は35%のみにとどまり、2年間の予後調査では、82%が症状の再発が無いが、ごく軽微なものにとどまっている(Seikkula J, Psychosis: Psychological, Social and Integrative Approaches. 2011)。この結果は、オープンダイアログが必ずしも薬物療法によらずに精神病症状を改善することを示唆している。

精神科を初めて受診する人やその家族の中で、薬物療法を積極的に希望する人は少ない。現在精神医学において行われている臨床研究の多くは、製薬会社主導の薬物療法についてのものが主であり、薬物療法を行わない治療効果の研究は精神医学分野においてあまり行われていない。オープンダイアログを行っていくシステムを確立することができれば、薬物療法以外の治療選択肢や生活上の選択肢が増し、薬物治療に伴う副作用が軽減することにつながると考えられる。

## 2. 研究の目的

統合失調症の急性期におけるオープンダイアログを用いた介入の有効性、安全性を確認することを目的とする。

## 3. 研究の方法

臨床試験として行う予定であったが、コロナ禍において、長時間、複数人でのミーティングを繰り返し行うことを、安全性を重視した臨床試験としてすることには、困難があった。このため、コロナ禍以前に予備的に行っていた、すでに通院中の方とのオープンダイアログの手法を用いた話し合いについて検討した。

## 4. 研究成果

通院中の方とその家族及び、医療スタッフ複数人でのオープンダイアログの手法を用いた話し合いの場では、対話を繰り返すことにより、参加者の自発性が促される印象があった。参加者が対等に自分の思いや興味のあることを語り、それぞれの話が無視されたり、否定されたりせず受け止められていく中で、安心感が育まれることが、自発性につながるのではないかと考えられた。自発的な活動についての話が増えていくとともに、精神症状についての訴えが減少したり、みられなくなったりする場合があった。精神症状の改善がない場合にも、危険な行為が行われるなど安全が脅かされる状況が生じることは無く、全体を通して安全に施行することが可能であった。

予備的な施行から言えることとして、本人及び家族が求める場合において、精神科医療にオープンダイアログを用いた介入をしていくことは可能であり、安全に施行できると考えられた。今後、急性期の精神症状について、複数人で対話的に対応するシステムを確立することができれば、結果として、薬物療法の行われる頻度を減少させ、薬物療法に伴う様々な問題を減少させる可能性があると考えられた。

オープンダイアログの世界観を共有していく中で、介入する医療者側にも自発性と対話的  
態度が育まれ、薬物療法以外の選択肢も考えやすくなるなどの変化が促されると実感された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金田礼三	4. 巻 5
2. 論文標題 フィンランドでオープンダイアログについて聴いたこと	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 最新精神医学	6. 最初と最後の頁 335 340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菊池 ゆひ (Kikuchi Yuhi)  (00749137)	金沢大学・保健学系・助教  (13301)	
研究分担者	長澤 達也 (Nagasawa Tatsuya)  (10334773)	金沢医科大学・医学部・講師  (33303)	
研究分担者	村松 朋子 (Muramatsu Tomoko)  (20633118)	京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・准教授  (34312)	
研究分担者	橋本 隆紀 (Hashimoto Takanori)  (40249959)	金沢大学・医学系・准教授  (13301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------